

日本の幼年童話 7

ふねできたゾウ

壺井 栄・作
箕田源二郎・絵



岩崎書店

日本の幼年童話 7

ふねできたゾウ

壺井 栄・作

岩崎書店 1971

131P 21cm/**NDC 913**

日本の幼年童話 7

ふねできたゾウ

1971年12月30日発行

著者／壺井 栄

発行者／岩崎徹太

発行所／岩崎書店

東京都文京区水道 1-9-2 〒112

電話 03・812・9131

振替 東京 96822

活版印刷／第一印刷株式会社

オフセット印刷／清水印刷紙工株式会社

製本／株式会社 小高製本

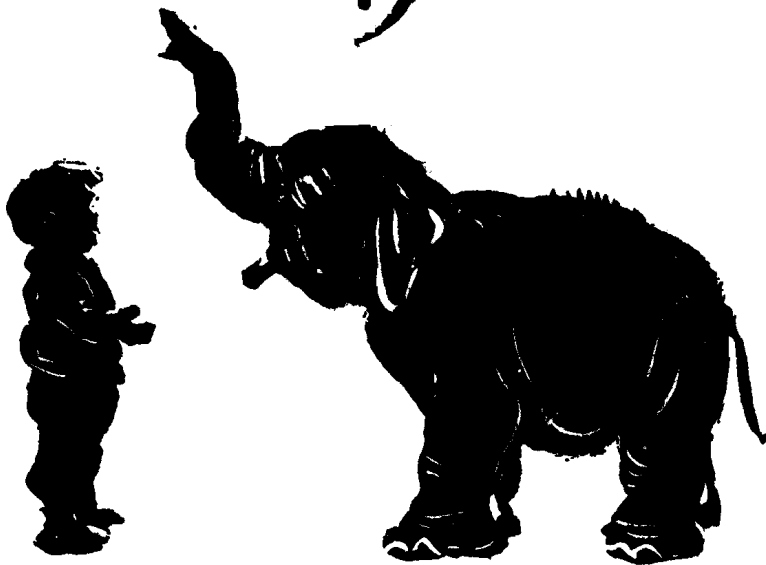
© Sakae Tsuboi, 1971

(分)8393(製)510771(出)0360

壺井 栄・作
箕田源二郎・絵

ふねできたゾウ

日本の幼年童話7
岩崎書店



日本の幼年童話 7 ふねできたゾウ もくじ

ふねできたゾウ……………5

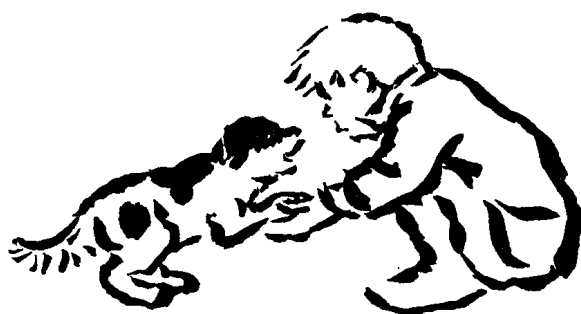
イヌならポチ……………17

直吉なおきちとネコとバラの花はな……………57

「ベア」ちゃん……………69

まどからみえるおとうさん……………81

耳みみからごほうび……………95



ポケットのなかのおかあさん……………111

花^{はな}はだれのために……………121

解説Ⅱ作家と作品について……菅忠道

装幀Ⅱ宮川源太郎
表紙・口絵・さし絵Ⅱ箕田源二郎



どくしや

読者のみなさんへ

このシリーズ『日本の^{にほん}幼年童話^{ようねんどうわ}』は、日本^{にほん}の近代^{きんだい}、現代^{げんだい}の創作童話^{そうさくどうわ}の中から、小学校初級^{しょうがくしゅうきょ}～中級^{ちゅうきょ}程度の読者^{どくしや}を対象^{たいしょう}に、現代^{げんだい}の子ども^この興味^{きょうみ}をひき、児童文学^{じどうおんがく}として朽ちない生命^{せいめい}をもつ作品^{さくひん}を精選^{ぜいせん}して、おもに作家別^{さつ か べつ}に編集^{へんしゅう}したシリーズです。

幼年童話^{ようねんどうわ}という形式^{けいしき}や枠^{わく}にとらわれず、作品^{さく}の質^{しつ}を第一^{だいいち}に、広い範囲^{ひろいはんい}から自由^{じゆう}な作品選^{さくひんせん}採^{たく}をおこなったところに、このシリーズの特長^{とくしょう}があります。父母^{ふぼ}、教師^{きょうし}の方たち^{かた}にも、あわせてご愛読^{あいどく}をえられれば幸いです。

編集委員^{へんしゅういゐん}

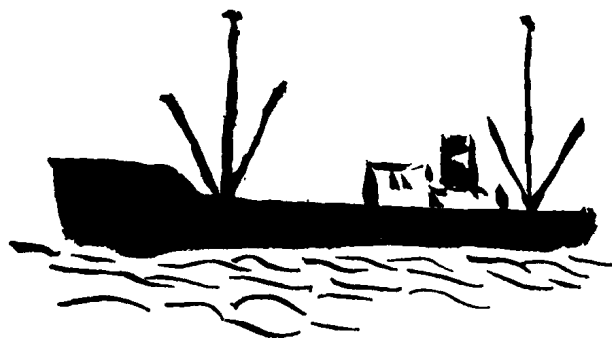
菅忠道^{かんただみち}／関英雄^{せきひで けい}／前川康男^{まえかわやす けい}

作者紹介^{さく しやしょうかい}

壺井 栄（つばい・さかえ）

1900年^{ねん}香川県^{かがわけん}小豆島^{しょうどしま}にうまれる。高等小学校^{こうとうしょうがく}を卒業^{そつぎょう}後^ご、村^{むら}の郵便局^{ゆうびんきょく}、村役場^{むらやくば}などにつとめ、25歳^{さい}のとき^{じようきよう}に上京^{じやうきやう}、おとなむきの小説^{しょうせつ}を書き始める。昭和15年^{しやうわ ねん}、最初^{さいしよ}の児童文学^{じどうおんがく}作品^{さくひん}「まつりご」を發表^{はつぴよう}。その後^ご、人間愛^{にんげんあい}の美^{うつく}しさをうたった数多^{かずおほ}くの作品^{さくひん}を書いて、女流作家^{じやうりゆうさか}としての名声^{めいせい}をあげた。代表作^{だいひやうさく}に短篇^{たんぺん}「坂道^{さかみち}」「柿^{かき}の木^きのある家^{いえ}」長篇^{ちやうへん}『母^{はは}のない子^こと子^このない母^{はは}と』『二十四^{にじゅう}の瞳^{ひとみ}』などがあ^ある。1967年^{ねん}6月^{がつ}23日^{にち}没^{ぼつ}。

ふねできたゾウ



とおいタイ国こくから日本にっぽんへ、ゾウがやってくるといふことが しんぶんにてたとき、東京とうきょうの子どもたちは ずいぶんよろこんでまわりましたね。かつ子こや史郎しろうたちもそうでした。ゾウがきたら、どうぶつえんへいこう。そういいあつて まつていたのです。ゾウのことが しんぶんにてるたびに、おかあさんはかつ子こたちに、それをおしえてくれました。

「ゾウがおふねにのりましたよ——」

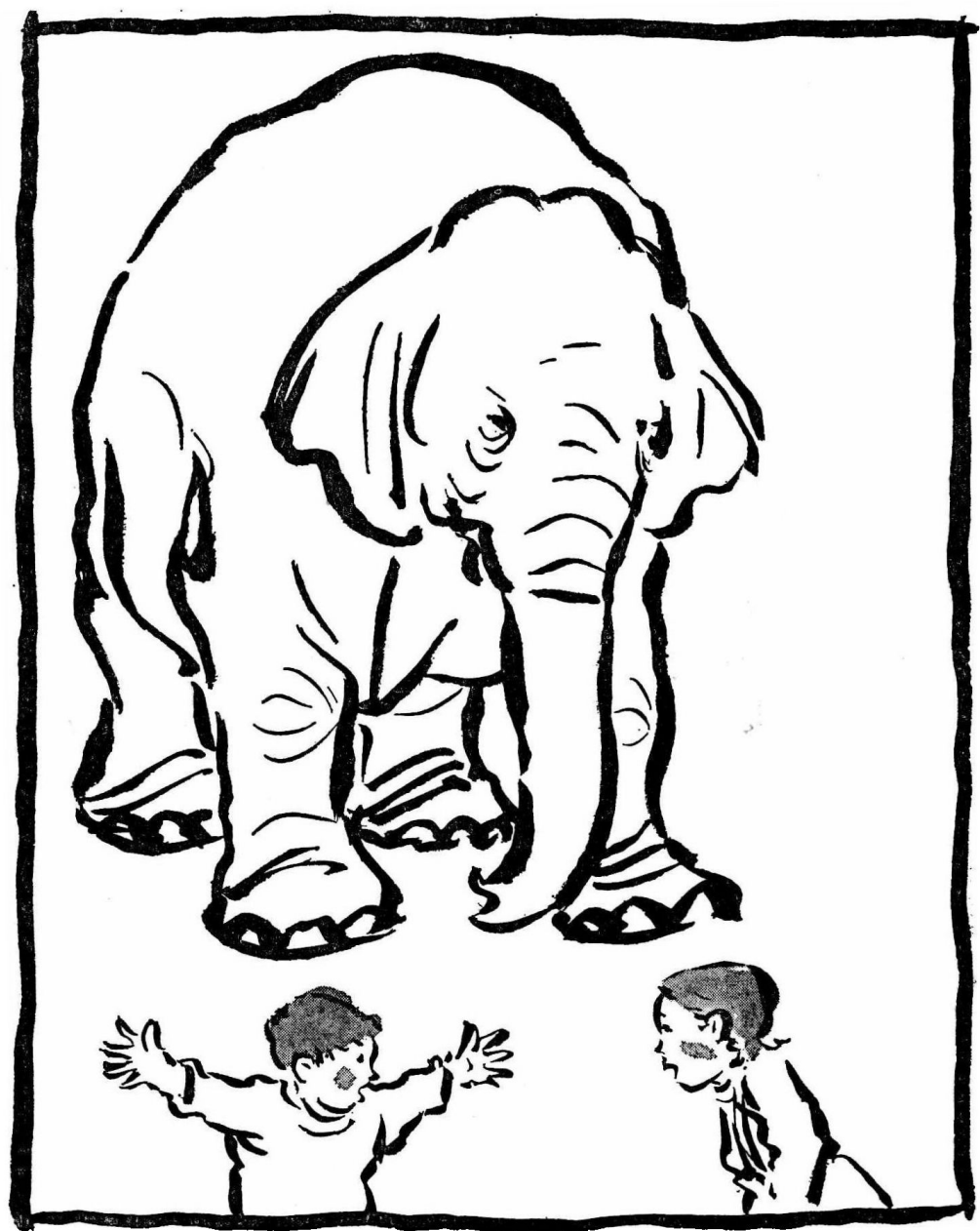
「ほら、ゾウのおふねが神戸こうべのみなとにつきましたよ——」

「ガチャ子こさんて名なまえだつて。神戸こうべの子どもたちが かんげいかいをしたんだつて——」

まだゾウをみたことのない、かつ子こや史郎しろうは、そのたびにおかあさんにきくのでした。

「ね、おかあさん、ゾウはお山やまほど大おおきいの？」

史郎しろうがいうと、しったかぶりのかつ子こは、



「おへやにはいるぐらいよ」

「そんなことあるかい」

それをきくと、かつ子は口をとがらして、

「でも、ケイ子ねえちゃんが、そういっておしえてくれたのよ」

きょうだい三人のなかでゾウをしているのは、ケイ子ねえちゃんひとりでした。ちょうどいまのかつ子ぐらいのとき、ケイ子ねえちゃんはゾウをみたということでした。そのとき、かつ子は三つで、史郎はあかんぼうだったといいました。あかんぼうの史郎はおかあさんにおんぶして、三つのかつ子はおとうさんにだかれて、みんなでいっしょに、どうぶつえんへいったのだと、ケイ子ねえちゃんにはなしてくれました。

もっとおどろいたことは、ケイ子ねえちゃんはそのとき、ゾウのせなかにのせてもらったというのです。ガチャ子さんが汽車にのつたということが、しんぶんにてたとき、ケイ子ねえちゃんはこんな

はなしをしてくれ、そしてそのゾウの大きさをたずねたかつ子に、

「そうね、トミ子ちゃんのおうちよりも大きいかな」

といったのです。トミ子ちゃんのうちは、やけあとにたてた小さなバラックのくつ屋さんでした。それをおもいだして、かつ子はゾウの大きさを、家ぐらいといったのです。そのことをいうと、おかあさんは、ああそうかというようにうなずき、

「でもね、それはおとなのゾウよ。こんどのガチャ子さんはまだ、六十貫（やく二百二十五キロ）の小さなあかちゃんゾウだってことよ。だから、子ウシぐらいじゃないかしら」

それでやっと、かつ子のとがった口もとが　なおりかけたところへ、史郎がまた、

「ゾウは、ゾーってなくの？　大きいこえで、ゾーってなくの？」
「ゾー」のところでうんと大ごえをはりあげたので、みんなのきげんはすっかりよくなりました。そして、ゾウがきしだいに、そのつ

ぎの日曜日^{にちようび}あたりにどうぶつえんへいこうということになりました。

そしてまもなくある日^ひ、夕食^{ゆうしょく}のあと しんぶんをみていたおとうさんが、

「お、ガジャ嬢^{じよう}がいよいよ どうぶつえん入りだよ。あしたのあさ、新調^{しんちよう}のはれぎすがたで 町^{まち}をねりあるくつてさ。さわぎだね」

それをきくと史郎^{しろう}もかつ子^こも、わあつとこえをあげました。そして、つぎの日曜日^{にちようび}です。おかあさんと三人^{さんにん}ででかけるはずのどうぶつえんいきが、おとうさんがかぜをひいたために、おかあさんは看病^{かん}することになり、ケイ子^こねえちゃんといくことになりました。

「ひさしぶりに、ゾウにでもものつてこようかな」

おかあさんとふたりで、おべんとうをつくりながら、女学生^{じようがくせい}のケイ子^こねえちゃんは、そんなじょうだんをいいました。それをながめながら、かつ子^こと史郎^{しろう}は、いつものように口^{くち}あらそいです。

「ガチャ子^こよ」

「ガジャ子だよ」

「ガチャ子よ」

「ちがう。ガジャ子だ」

「ガチャ子だってば。しんぶんにかいてあったわよ」

「ちがうよ。ガジャ子って、みんないってらい」

ふたりのいいあいっこをきくと、ケイ子ねえちゃんがけらけらとわらいだし、

「ちがうのよ、花子よ。まえにいたゾウの名まえをついで、花子さんてゾウにかわったんだってよ。そのしんぶんにてでいたわ」

するとこんどは、おかあさんがケイ子ねえさんにむかって、

「ケイ子、朝日しんぶんをみたかい？」

「いいえ。なあに」

ケイ子ねえちゃんは、ゴマのついたおむすびを、竹のかわにつつまながらききました。

「青えんぴつってとこにでたのよ。ガジャちゃんをむかえてよろこんでいるみなさん、六年まえに上野にいたトンキーちゃんをごぞんじですか。いいえ。トンキーちゃんのあわれなさいごを、つけてくださいでね……」

おかあさんのおはなしは、昭和十八年のこと、せんそうがはげしくなるちよつとまえに、どうぶつえんのけだものを ぜんぶころせというめいれいが軍部からでたとき、いまガジャ子のせわをしている、どうぶつえんの福田おじさんが、このやくをいいつかって、いやいやながらどくをのませようとしていましたが、りこうなゾウのトンキーちゃんはどうしてもものまない。ちゅうしやをしようにも、かわ

があつくてはりがとおらない。

そこで、うえじにさせることになったということです。なにもたべものをやらないので、六百貫





(二千二百五十キロ)——ガジヤ子さんの十ばいです。その六百貫のトンキーちゃんはみるみるやせて、おじさんがそばにくくと、おいもほしさに さかだちの芸をしてみせたというのです。

そしてそれから一か月のちの九月二十二日、ほんとうにやせて、ばったりたおれてしんでしまいました。——そうかいてあったのだそうです。おかあさんは ぽろぽろなみだをこぼしながらはなしました。きいていた

ケイ子^こねえちゃんが、とつぜん、りょうてでかおをかくして なき
だしました。そして小^ちさなこえで、

「かわいそうだわ。かわいそうだわ」

と、しゃくりあげました。

「ほんとに、おかあさんもつらくてね。ゾウはしぬとき、けっして
はたのものに しがいを見せないというくらいなのに、トンキーち
ゃんもつらかったろうよ。さかだちをしてみせたなんて、なかせる
じゃないか。せんそうなんて、こんないやなこと^{はなこ}がたくさんあるん
だよ。だから、ガジャ子^こさんは、名^なまえは花子^{はなこ}さんになっても、そ
んなことに ならないようにしなくちゃね」

おかあさんとケイ子^こねえちゃんが ふたりともないたので、どう
ぶつえんいきがだめにならないかと、かつ子^こも史郎^{しろう}も、かたずをの
んでふたりをみていましたが、ケイ子^こねえちゃんはすぐなみだのか
おをぬぐって、したくをはじめましたので、かつ子^こたちは、ほっと

しました。でもふたりは なんとなくおとなしくしていました。

「いってまいりまあす。みんなで、トンキーちゃんの墓^{はか}まいりもしてくるわね」

みおくりのおかあさんに、ケイ子^こねえちゃんはそういいました。

そのかおは、もうわらっていました。

「いってまいりまあす」

ふたりはさきになって えきのほうへかけだしました。とちゅう

でふりかえると、家のまえにたってみおくっていたおかあさんは、

たかくかた手^てをあげて、ひらひらとふりました。

秋^{あき}のある日曜日^{にちようび}の あさのことでありました。